

旧ユーゴスラヴィアにおけるサッカーと民族アイデンティティ
A study of soccer in former Yugoslavia and ethnic identities

1K07B095-3

指導教員 主査 石井 昌幸 先生

境 真里奈

副査 寒川 恒夫 先生

【はじめに】

ユーゴスラヴィアは1929年から2003年の間存在した東欧の社会主義国家のひとつである。本来この地域は、ヨーロッパやアジアから来た様々な民族がモザイク状に入り混じり、常に不安定性を孕んだ場所であった。それゆえに人々の帰属意識もそれぞれ異なるが、それが冷戦構造の崩壊によって民族主義へと向かい、内戦へと発展した。

サッカーのユーゴ代表チームは、こうした民族対立に翻弄されてきた。国家解体後、かつての代表選手はばらばらになってしまった。ユーゴ時代、国民はクラブに「民族の誇り」を重ね、クラブの勝利によって民族の優越感を感じたが、代表選手たちは、国家の代表としての誇りと、一民族としてのアイデンティティの挟間で揺れていた。

本研究では、ユーゴスラヴィアのサッカー文化を、この複雑な紛争の歴史と照らし合わせることによって、スポーツが統合と分裂の中で、アイデンティティの選択・表現とどのように関わってきたのかを考察する。

【第1章】

第1章では、本研究の前提として、ユーゴスラヴィアという国家の成立から解体までを歴史的に考察した。他の社会主義国家でも見られたように、「異なる民族の積極的平和共存」を掲げたこの新しい連邦国家は、チトーというカリスマによる指導者のもとで、強権的な統合を押し進めた。そのため、チトーの死後は、各民族の独立要求が高まり、紛争へと発展した。

【第2章】

第2章ではこうした紛争や社会情勢の流れを踏まえたうえで、サッカー代表のたどった歴史と各地域の背景を追っていく。進む国内国家の離脱による各民族の独立意識の高まり、それに続く紛争の激化によって代表チームや国内のクラブは様々な影響を受けた。特に民族対立の象徴となった1990年のツルベナ・ズベズダ対ディナモ・ザグレブの試合、その因縁の対決を思い起こさせることとなった1999年のユーゴスラヴィア対クロアチアの試合は非常に鮮烈にその時代を生きた人々の心情を反映している。またユーゴスラヴィア代表は世界で活躍する有能な選手を有していた黄金時代があったにも関わらず、あと一步のところまでワールドカップやユーロで上位に名を残すことができなかった。どの国の代表よりも過酷で数奇な運命をたどることになってしまったのである。

第2章においてはさらに、ユーゴスラヴィアにはある4つのクラブに人気と戦力が集中しており、それを取り巻く環境や歴史は色濃く当時の民族意識が反映されていた。そのことはユーゴスラヴィアの代表選手やサポーターのサッカー観や民族感情の形成に関わった。また国内でも最も複雑に民族の入り混じっていたボスニア・ヘルツェゴビナのクラブにおいても、クラブ名称と本拠地の関係において紛争の歴史との関連性がみえた。

【第3章】

最終章においてはユーゴスラヴィア紛争が残した爪痕ということに焦点を置き、人、もの、動きにどのような変化が起きたかを考察した。ユーゴスラヴィアサッカーの歴史を紡いできたかつての代表は、当時の心境、政治そして民族について語り、紛争のもたらした悲劇を伝えている。かつては出身民族など深く考えることなどなかった選手たちも、時代の流れで自分がどの民族に属するのかということに向き合わなければいけない現実があった。

また目に見える形で戦争の軌跡は今も残っている。サラエボにあるゼトラ屋外競技場、コソボスタジアムの脇にはスポーツで感じられる躍動感とは何とも対照的な景色として、一面に墓標が連立している。このように争いの爪痕が色濃く残るサラエボでも新たな動きが生まれた。これまで民族対立の象徴とされていたサッカーで、異なる民族の壁を越えようというプロジェクトがある。国境を隔てた子どもたちが、サッカーを通じて一つになり、自らの手で民族融和を叶えたのだ。

【おわりに】

ユーゴスラヴィアという国家は一度は異なる民族が統合し、互いの民族の壁は取り払われたかのように思われた。しかし潜在的な民族主義が露になると、一瞬のうちに戦火が広まった。その影響はサッカー界にも飛び火し、クラブや選手間の交流が民族主義を誇示する場と化してしまった。ユーゴスラヴィアの人々は民族の帰属の象徴をサッカーに投影していた。このことが国や民族の「優劣」としてではなく「誇り」として感じられるような、正しい民族の自覚へと今後導いてくれることを願ってやまない。